

複文の従属関係と主語省略について

— 「～ノデ」節を中心に—

On the dependence of the complex sentence and the Subject Omission

— With a focus on the “node” subordinate clause —

付 改 華 ¹

Fu Gai Hua

This paper focuses on the omitted subject of the “*node*” subordinate clause in Japanese, and aims to make it clear what kind of ellipsis-principle can be applied to the sentences, by closely observing the intra-sentential, discourse, and situational contexts. It has been found that there are many un-omitted subjects in the “*node*” subordinate clauses in our research because of the “master-and-servant relationship” between the subordinate clause and the main clause relations of the “*node*” clause. And by identifying the referents of subjects, it has been found that there are four patterns of the missing-subject constructions in the “*node*” subordinate: the “main-clause-theme coreference” model, the “precedent-topic coreference” model, the “speaker/hearer coreference” model, and the “no coreferential element” model. It has turned out that the referent of the subject in a subordinate clause will be easily omitted in coreferentiality with the main clause theme or with the precedent-topic, which has verified the universal application properties of the Kuno’s (1978) Ban on Conflicting Empathy Foci (BCEF). On the other hand, if the subject in a subordinate clause functions as a part of background information, or functions to express the communication manner of the speaker, it will be hard to omit.

キーワード： 一致要素 省略条件 節関係

Keywords: Referent, Ellipsis-principle, Dependence of the clauses

0. はじめに

複文の構造の観点から従属節における主語/主格²の選択、表れ方などを論じる研究成果は多々見られる(南(1974)、益岡(1997)、野田他(2002)、成山(2009)など)。これらの研究は、従属節における主語の省略条件および制約要因を解明するのに大変有益であるが、従属関係がいかに主語の使用を制限するのかについてはさらなる検討が必要である。付(2012b)では、「～カラ」複文の従属関係と主語省略との関わりを検討したが、本稿では、「～ノデ」

節を中心に、従属節における主語省略のパターンを考察し、それぞれの主語省略の条件を求めることにする。さらに、「～カラ」節と「～ノデ」節の比較によって、従属関係と主語省略との関わりをより明確にしたい。

1. 先行研究

1.1 南(1974)の研究

南(1974)は、従属節をその内部における様々な要素の表れ方に基づき、A、B、C という 3 つの類に分けている。A 類は～ナガラ(継続)、～ツツを代表する形を用い、動作の様子、仕方などを表すもので、主語が現れないのが普通である。B 類は～ノデを代表する形を用い、条件、理由・原因、逆接、継起的または並列的な動作・状態などを表し、主語が現れることがあるが、「提示の意味」を表す「～ハ」が現れない。C 類は～ガ、～カラ、～ケレド、～シの形を伴い、主格だけでなく、「～ハ」の形も現れることができるとされている。例えば、次の例を見てみよう。

- (1) (船 i ハ) [ϕ_i^3 汽笛ヲナラシツツ] ⁴ 岸壁ヲハナレタ。 (南 1974 : 122)
- (2) [人出モソレホドニハ多クナカッタノデ] タスカッタ。 (南 1974 : 124)
- (3) [デパートハ午後コムカラ]、午前中行ッテキタガ、ソレデモケッコウオ客ハ多カッタ。 (南 1974 : 126)

(1) の [] の中は A 類従属節で、主語が主文主題「船は」と同一指示的で、文に表れていない。(2)は B 類で、従属節に主語が表れ、「人出モ」の形となっている。(3)は C 類で、従属節の主語は「デパートハ」の形になっている。

南(1974)の分類によって、主語の使用は従属関係に関わっていることが検証されるが、一体どのように関与しているのかについては、類型ごとに検討する余地があると思われる。それに加えて、同じ因果関係を表すのに、「～ノデ」節と「～カラ」節はそれぞれ B 類と C 類に分類されているのがなぜか、それについて主語の表れ方を調査することによって何らかの結論が得られるか、などの課題が残されている。

1.2 野田他(2002)

野田他(2002)は、主文の主格との一致性から従属節の分類を次の表 1 のように行っている。

節の種類	節の例
節の主格を主文の主格と一致させなければならない節	「～ながら」「～まま」など
節の主格を主文の主格と一致させるのが普通の節	「～とき」「～ために」など
節の主格を主文の主格と一致させなくてもよい節	「～けれど」「～から」など

表1 主格から見た節の種類(野田他(2002))

野田他(2002)の研究によっても、主文の主格との一致性は主語省略の実現とはある程度の関連性があることが検証されている。しかしながら、従属節の主語省略は省略パターンが複雑である。本稿では、「～ノデ」節を中心に、従属節の省略パターンとその条件を説明することにする。

1.3 成山(2009)

成山(2009)は複文における主語省略を制限する要因の一つとして、「接続詞の制約」を次の表2のように指摘している。

SS(同じ主語)=ながら、て、し、つつ、ために、まま、接続詞なし
DS(異なる主語)=と、たら、が、ので、ように(目的を表す)

表2 接続詞の制約

成山(2009)によれば、主節と従属節の主語が同じである場合、従属節の主語が省略されるのがふつうであるが、主語が異なる場合には、文の省略主語を理解するには従属関係を説明することが求められる。次の(4)、(5)を見てみよう。

- (4) SS : a. 母は [(母が)テレビを見て]、泣いていた。
b. [(母が)テレビを見ながら]、母は泣いていた。

(成山 2009 : 77)

- (5) DS : a. [(母が)見ると]、母は泣いていた。
b. [母が帰ってきたので]、(*母が)電話をかけた。

(成山 2009 : 77)

(4)では、主節と従属節と同じ主語を持つことを要求する「て」、「ながら」が使われているから、従属節では主語が省略されるのがふつうであるとされている。一方、(5)においては、

主節と従属節と異なる主語を持つことを要求する「と」と「ので」が使われているので、省略主語が主節或いは従属節の主語と一致するとは考えないのである。しかし、このような制約は絶対的なものではない。例えば、次の(6)、(7)のような文も見られる。

(6) 〔私が料理し〕、夫が片づけをする。 (成山 2009 : 77)

(7) 〔(X が)学校にいったら〕、買い物をさせられた。 (成山 2009 : 78)

(6)では、主節と従属節と同じ主語を持つことを要求する「接続詞なし」という方略が使われているが、従属節と主節とでは主語が異なり、両方とも省略されていない。一方、(7)では、主節と従属節と異なる主語を持つことを要求する「たら」が使われているが、主節と従属節とでは主語が同じで、両方とも省略される。従属節における主語省略がいかなる要因で制限されているのかについてはさらなる検討が必要である。

1.4 まとめ

以上、複文における従属節の主語の選択や現れ方について、節の構造の面から検討した先行研究を概観した。それぞれの先行研究を通して、従属節における主語の現れ方についての制限はある程度確認できた。しかし、前述したように、文の構造上の形は結局従属関係の表れであり、その構成要素の表れ方を考察するには従属関係への検討が必要であるように思われる。本稿は、紙幅の関係で、「～ノデ」節を中心に、従属節における主語省略の省略パターンを考察し、その主語省略と従属関係との関わりを検討する。

2 研究対象と研究方法

2.1 研究対象

本節では、従属節の類型と主語についての規定を明らかにする。

2.1.1 従属節の類型

本稿では、複文や従属節の類型に関する規定は日本語記述文法研究会(編)(2008)に従う。即ち、複文とは、2つ以上の述語を持つ文である。1つの述語を中心としてまとまりを成す文の一部分は節で、複文は2つ以上の節からなりたつ文である。従属節が主節に対して果たす役割によって、複文は表3のように副詞節、補足節、名詞修飾節、等位節・並列節の4種類に分かれる。

副詞節	様態節	～ながら、～ずに、～まま、～ように
	原因・理由節	から、 ので
	条件節	仮定的条件、非仮定的条件
	時間節	時間名詞
	目的節	～ため(に)、～よう(に)
並列節		順接、逆接
補足節		引用節(～と)、名詞節(～こと/の)
名詞修飾節		限定的、非限定的

表3 節類型

本稿では、複文の従属節としての理由・根拠を表す「～ノデ」節を研究対象にする。

2.1.2 主語の規定

先行研究では、複文における主語の省略に言及する場合、主題と呼んだり、主格或いは主語と呼んだりしている。本稿では、主語についての規定は、仁田(1997: 166)に従う。即ち、「《主語》とは、述語の表す動きや状態や関係を体現する主体として、文の表している事態(文の叙述内容である出来事や事柄)が、それを核として形成されている、といった事態の中心をなしている構成要素である」。しかし、仁田では、どのような要素が主語になりうるのかということをまだ明らかにしていない。本稿は、仁田(1997)を参考にして、日本語の主語の特性を次のように規定する。

- (8) a. 属性文の主体
 - b. 情意・感覚の主体
 - c. 状態の主体
 - d. 出現・生起・変化の主体
 - e. 動きの主体(能動文は動作主で、受動文は被動者である)

但し、形態的に係助詞「ハ」でマークされる主題は主語を兼務することも多く見られる。このような主題機能をもつ主語、即ち主題主語は、「主語」と呼びながら、主題特性が文構成に対する役割を果たすことを念頭において、その時は「主題主語」を短縮して、単に「主題」と呼ぶこともある。

2.2 研究方法

複文の主節及び従属節において省略された主語が、いかなる要素と同一指示的かを観察すると、さまざまであることがわかる。本稿では、まず従属文において主語省略が生じるかどうかを調査する。またそれぞれの省略主語または非省略主語をそれらと同一指示になる要素が主節主題(Theme)か、主節補語(complement)か、先行話題(Topic)か、話し手(Speaker)/聞き手(Hearer)かによって分類する。言語使用の実態については、小説『白夜行』からのデータを集めて調査する。

3. 調査結果

調査の結果は次の表 4 のようになる。

同一指示 対象	主節主題 ⁵	主節 補語	先行 話題	話し手/聞 き手	一致要素なし	合計
省略例	27	0	14	5	2	48
非省略例	0	0	24	0	51	75
合計	27	0	38	5	53	123

表 4 「～ノデ」節での主語省略の分布

表 4 で示されるように、本稿で観察した 123 例の「～ノデ」節のうち、主語省略の例は 48 例で、非省略の例は 75 例ある。省略に比べて、非省略の例が多く見られる。省略のデータの中、主節主題と同一指示的になるのが最も多く、27 例観察された。その次は「先行話題一致」型主語省略であり、14 例あった。それに対して、「話し手/聞き手一致」型主語省略は 5 例、「一致要素なし」型は 2 例しか見られず、「主節補語一致」型主語省略は 0 例であった。一方、非省略の場合では、「一致要素なし」型は 51 例、「先行話題一致」型は 24 例、「主節主題一致」型と「主節補語一致」型、「話し手/聞き手一致」型はいずれも 0 例であった。では、主語省略と主語非省略のそれぞれのパターンを見てみよう。

3.1 「主節主題一致」型主語省略と非省略

本稿での調査では、「主節主題一致」型主語が 27 例見られ、なおかつ 27 例はいずれも省略の例で、非省略のデータは観察できなかった。次の例を見てみよう。

(9) 友彦_iは〔_{φ_i}電話番号を暗記していたので〕、この場でそれを教えた。

(『白夜行』)

- (10) 誠_iは、〔 ϕ_i それほど強引なことをしているつもりはないので〕、戸惑うしかなかった。

(『白夜行』)

(9)と(10)では、従属節での省略主語 ϕ_i はそれぞれ主節主題主語「友彦は」と「誠は」と同一指示的になっている。本稿では、「主節主題一致」型主語省略は付(2012a,b)の視点の観点によって解釈できると思われる。即ち、話者は視点を事柄の参与者のどれかに寄りながらある事柄を述べていくのが普通であり、この視点の置かれた参与者は談話の展開していく中心事項、即ち話題である。この話題は文脈の中での談話中心(先行話題)である場合もあれば、当の文が展開していく主題(常に「ハ」が伴う)の場合もある。論理的に言えば、ある談話における視点関係は次のように表すことができる。

$$1=E(\text{話者}) \geq E(\text{先行話題}) \geq E(\text{文主題}) > E(\text{文補語})^6$$

「主節主題一致」型主語省略(「「X は…(X が)…」文型にあたる)の文においては、主題を表す「ハ」の関与によって、話者の視点が常に「X」寄りになり、視点関係は、 $1=E(\text{話者}) \geq E(X)$ である。「視点の一貫性」の原則によると、従属節でもその視点が「X」に寄ることになり、つまり、「X は…(X が)…」は普遍的適用性を持っているということになる。さらに、これは同類型の主語非省略の例が見られない理由にもなるとと思われる。

3.2 「先行話題一致」型主語省略と非省略

本稿の調査では、「先行話題一致」型主語省略は14例、非省略は24例見られた。まず、省略の例を見てみよう。

- (11) ①桐原_iは、ややつり上がった目で向かいの二人を眺めながら、右手の人差し指でテーブルの表面をこつこつこつと叩いた。②〔まるで ϕ_i 値踏みするような目つきだったので〕、友彦は少し不快になった。

(『白夜行』)

(11)では、「～ノデ」節のある複文は②文であり、その省略主語は文①の主題「桐原は」と同一指示的である。この「桐原は」は①で主題として働き、なおかつその次の談話展開では、介入要素がない限り、その主題機能が維持され、談話話題として働くことが常に期待される。(11)では、それは談話話題として②の前半、即ち「～ノデ」節まで及んでいくことになっている。

さらに、主節主題「友彦は」は文全体の先頭ではなく、文の後件「少し不快になった」のすぐ前にあることに注意すべきである。即ち、主節主題「友彦は」は「～ノデ」節の前に来ていないことによって、先行話題「桐原」の一貫性が「～ノデ」節まで保たれ、省略されるのもごく自然になっている。即ち、「先行話題一致」型主語省略は主節主題が複文の後件にあるのが最も無標である。

もう2つの例を見てみよう。

- (12) …①これから出かける、とだけ母親にいて、友彦_iは家を出た。②母親は何も疑っている様子はなく、大変やねえ、と感心したようにいった。③〔 ϕ_i 急いで家を出たので〕、まだ電車は動いていた。

(『白夜行』)

- (13) ①店を出た後、誠は彼女_iを家まで送っていくことにした。②当然彼女_iは一旦辞退した。③しかし〔 ϕ_i 嫌がっているようには見えなかったので〕、誠はさらに強く申し出た。

(『白夜行』)

(12)では、文①の主題「友彦は」は談話主題になり、③の「～ノデ」節まで及んでいる。途中には「母親は」が介入しているが、「友彦」について物事を叙述する場合の話題候補であるから、小説の語り手はそれに視点を移入する理由がない限り、談話話題には昇らなく、「友彦」の話題性が維持されていくのが期待される。それに対して、(13)では、「誠」は談話主題であるが、③の省略主語は①の目的語として機能する「彼女」と同一指示的である。「彼女」は②文では文主題に昇格し、さらに談話話題として③の前半まで及んでいくのがそれが省略される理由である。なお、話題性の高い「彼女」の介入によって、③文の後半で再び「誠」を言及する場合、それを明示することが要求される。

先行話題とは同一指示的で、尚且つ主節主題の干渉がないなら、その主語が省略されるというわけでもない。次の例を見てみよう。

- (14) ①一方、桐原洋介_{T1}の足取りに関する新たな情報_Tも得られていた。②金曜日の六時過ぎ、彼_{T1}が一人で歩いているのを、薬局の店主_{T2}が見ていたのだ。③店主_{T2}によれば、声をかけようと思ったが、〔桐原_{T1}が急いでいる様子だったので〕、かけないでおいたということだった。

(『白夜行』)

(14)では、文③の従属節「桐原が急いでいる様子だったので」の主語「桐原が」は先行文脈

での話題人物「桐原」と同一指示的であり、省略されていない。しかし、ここで注意すべきことは、先行文脈では、「桐原」は話題人物であるが、(14)において言及される場合では、いずれも省略されていないことである。なぜかという、(14)では、談話の中心は「桐原洋介の足取りに関する新たな情報」であり、「桐原」は「新たな情報」の内容を構成しているからであるように考えられる。その「新たな情報」を構成する内容の中では、「店主」は「桐原」より話題性が高い。(14)における話題転換及び話題性関係は、次のように示すことができる。

$$(T_1 \rightarrow) T (\rightarrow (T_2 (> T_1) \rightarrow (T_2 (> T_1)))))$$

つまり、(14)では、話題Tの前提で、 T_1 と T_2 の交わりを客観的に述べ、なおかつこの交わりの中で T_1 (「桐原」)の話題性が最も低い。この場合、 T_1 (「桐原」)を再び明示したのは普通である。本稿では、このような明示を情報の再提起と呼んでおく。(14)に対して、最も典型的な「先行話題一致」型主語省略例(11)では、「桐原」の先行話題性は最も高いため、話し手は視点を②の主題において先行話題「桐原」についてのことを述べていることは簡単に理解される。

また次のような例文も見られた。

- (15) ①舌なめずりしそうな顔つきで封筒の中を見ていた牟田 T_1 は、雄一 T_2 を見ると片方の頬だけに不気味な笑いを浮かべた。
 ②「なかなかええやんけ」
 ③「そうやろ？ 結構苦労したで」雄一 T_2 はいった。④「顧客 T_1 が満足してくれた様子なので」、内心ほっとしていた。

(『白夜行』)

(15)では、④の従属節主語「顧客が」は文①の主題主語「牟田は」と同一指示的である。①、②では、小説の述べ手は客観的な視点で「牟田」と「雄一」の行動を述べたが、③、④では、主観的な表現「内心ほっとしていた」からは、視点関係は、次のようになると考えられる。

$$1 = E(\text{話者}) \geq E(\text{雄一}) \geq E(\text{牟田})$$

つまり、③、④では、話者は「雄一」の視点で「牟田」の行動を理解しているから、④では「牟田」の明示をしなくても可能であるかと思われるが、ここでは、「牟田」ではなく、

「顧客」の形で明示されているのは、「雄一」の「牟田」を「顧客」のように対応するという内的状態が捉えられるだろう。

3.3 「話し手/聞き手一致」型主語省略と非省略

今回の調査では、「話し手/聞き手一致」型主語省略が5例であり、非省略の例が見られなかった。また5例いずれも対話の形で現れている。次の例を見てみよう。

- (16) 「〔 ϕ_s 今すぐここへ持ってきますので〕……」 (『白夜行』)
- (17) 「それは別にいいんですけど、〔 ϕ_s このホテルに予約をとってあるので〕……」 (『白夜行』)
- (18) 「ある事件のことで捜査をしてましてね、〔 ϕ_s 西本さんにお尋ねしたいことがあるので〕、お邪魔したというわけです。留守中に上がり込んで、すみません」 (『白夜行』)

(16)、(17)、(18)では、それぞれの「～ノデ」節で主語省略が起こり、省略主語がいずれも話し手と同一指示的である。「話し手/聞き手一致」型主語省略は、具体的な発話場面で、動作の主体がコンテクストから容易に捉えられ、共通の既知情報には特別な言語効果がなない限り、それを言わないほうが話し手にとっても聞き手にとっても処理負担が少なく、より経済的である。特に小説では、話し手と聞き手が会話をすることが多いので、「話し手/聞き手一致」型主語省略が多く見られると予測される。しかし、今回の調査では、注目してほしいのは、「～ノデ」節における「話し手/聞き手一致」型主語省略がごく少数見られたということである。むしろ「～カラ」節の主語省略がより多数であるように思われる。実は、付(2012b)での調査では、まさにその傾向が見られたのである。例えば、次の「～カラ」節の省略例を見てみよう。

- (19) 〔 ϕ_s すぐに食べられるものを買ってきたから〕、 ϕ_H そんなに待たなくてもいいわよ。 (『白夜行』)
- (20) 待ったさ。飽き飽きするぐらいね。インスタントラーメンでも食おうかと思っていたところさ。〔 ϕ_s だけど結局出来合いの惣菜を食べさせられるわけだから〕、大した違いはなかったということだ。 (『白夜行』)
- (21) 〔 ϕ_s 遅いから〕、 ϕ_H 様子を見に来たの。 (『白夜行』)

(19)、(20)、(21)では、 ϕ_s の指示対象は話し手で、 ϕ_H の指示対象は聞き手である。以上の「～ノデ」節の例と対照してみると、「～ノデ」節のある文はより丁寧さが高いことがわかる。これについては、永野(1952)は、「～カラ」は「理由・原因」を表し、「～ノデ」は「原因・理由・根拠・きっかけなど」を表す点では、両者は基本的にはほぼ同じ意味になるが、「～カラ」は前件と後件が原因と結果等の関係にあることを特に強く、いわば主観的に示そうとする語気に伴うことが多いに対して、「～ノデ」は表現者の主観的判断によらずとも明白な事実であるような場合に多用され、したがって条件としての独立性は「～カラ」より弱いとしている。同じような指摘は前田(2009)によってもなされている。例えば、前田(2009: 134)は、「カラ」と「ノデ」の意味的違いを次のようにまとめている。

ので	原因	対象の論理	話し手の意識の外で進行する出来事の間 原因・結果の関係
から	理由	私の論理	話し手が設定した原因・結果の関係

表5 「カラ」と「ノデ」の意味的違い

このような意味的違いは主語の使用に反映すると、「ノデ」節は、主語非省略が主語省略より頻繁に見られることになる。また、「～カラ」に比べて、「～ノデ」のほうが話し手の意図を和らげ、聞き手に威圧感を与えないので、丁寧表現の際は、「～ノデ」が使われるのが無難である。本稿の調査対象である『白夜行』には特にフォーマルでない日常的な対話場面が主となるので、「～カラ」節のほうに「話し手/聞き手一致」型主語省略と非省略の例が多く見られるのも不思議ではないように思われる。

3.4 「一致要素なし」型主語省略と非省略

今回の調査では、「一致要素なし」型主語省略はわずか2例しか観察できなかった。それに対して、非省略の例は51例も見られた。まず省略の例を見てみよう。

(22) 「 ϕ 暗かったので」、それが彼だと最初気づかず…。

(『白夜行』)

(23) 「 ϕ すでに午後六時近くになっているので」、通りを走る車のヘッドライトの光が、彼の身体をスキャンするように通過していく。

(『白夜行』)

(22)、(23)の「～ノデ」節では主語省略が生じている。その省略主語を補うとすれば、なかなか難しいが、意味の理解には支障がないのは確実である。なぜかという、(22)の場合で

は、述語「暗かった」の主体は特に言わなくても普通「空」か「光」かになり、(23)の場合では、述語「午後六時近くになっている」の主体は普通「時間」になると考えられがちである。つまり、その主体は常に述語によって推測できるものになるのである。

一方、非省略の例のなかでは、新情報、特に「背景情報」の提供になるものが多く見られた。ここでいう「背景情報」とは、「主節で表される事柄が行われるための前提的な情報」とのことである。例えば、次の例で、(24)では「畳の上に座布団が一つ置いてあった」が後件の「それを指して笹垣は訊いた」の行われる背景となり、(25)では「ドアのすぐ横に押しボタンがあったので」が後件の「笹垣はそれを押した」の行われる背景となっている。

(24) 「畳の上に座布団が一つ置いてあったので」、それを指して笹垣は訊いた。
(『白夜行』)

(25) 「ドアのすぐ横に押しボタンがあったので」、笹垣はそれを押した。
(『白夜行』)

ただし、ここで注意しておきたいのは、(24)、(25)の「ノデ」節は実際原因・理由を表さないことである。本稿では、この「ノデ」の用法を、「背景情報の提供」と呼ぶ。

また、次のような例も見られた。

(26) 西布施警察署の捜査員の話によると、死体を見つけたのは近所の小学三年生だった。[今日は土曜日なので] 学校は午前中だけである。午後から少年は同級生と五人で、このビルで遊んでいた。
(『白夜行』)

(27) 江利子は一旦ドアを閉め、チェーンを外してから改めて開けた。しかし知らない男を家に上げる気にはなれなかった。「あの… [家の中は散らかっているので] …」
(『白夜行』)

(26)は一見(22)、(23)と同じように、述語の主体が言わなくても理解には支障がない例であるが、ここでは、「死体」の発見時の背景情報であり、つまり、情報伝達の上に語り手のより客観的な視点が捉えられ、話者態度という伝達効果が伝わったのである。同様、(27)では、「家の中は」は省略されてもコンテキストからは読み取れるのであるが、「 ϕ 散らかっているので…」に比べて、非省略のほうが「江利子」の慎重さ、「知らない男」への不信感と距離感が伝わる。つまり、「一致要素なし」型主語非省略は、背景情報の提供のほか、伝達態度の表明の場合でも見られるのである。

4. 結論

以上、本稿では、「～ノデ」節を対象として、従属節における主語省略を「主節主題一致」型、「主節補語一致」型、「先行話題一致」型、「話し手/聞き手一致」型、「一致要素なし」型という5パターンに分けて、それぞれの省略条件を検討した。結果として次のようなことがわかる。即ち、「～ノデ」節では、主語非省略が省略よりも多数観察される。これは、「～ノデ」の表す「客観的因果関係」という主従関係に由来すると考えられる。一方、主語省略のデータの中、主節主題と一致する主語の省略は最も頻繁に見られることから、「X は…(X が)…」の普遍的適用性が検証された。なお、「一致要素なし」型主語非省略が多数であったことによって、「～ノデ」節の背景情報の提供機能や、伝達態度の表明などの談話機能が捉えられるように考えられる。

本稿では、研究対象を小説一部にして調査を行い、「～ノデ」節における主語の省略傾向が或る程度明らかにしたが、作者の個性や文章のジャンルによって、言語使用には違う傾向が見られると予測できるので、より多くのデータを集計して検討する余地がまだある。

〈注〉

- 1) 執筆者は中国南通大学に勤務し、本稿は中国南通大学「人才引进プログラム：日本語における主語省略についての研究」のもとで行われる研究成果の一部である。
- 2) 「主語」と近接した概念に「主格」と「主題」とがあり、三者は構文レベルを異にする概念である。「主語」は、統語構造上文の表している事態(文の叙述内容である出来事や事柄)が、それを核として形成されている、といった事態の中心をなしている構成要素であり、他の語との結合や配列を表すものの一種である。それに対して、「主格」は普通主格助詞「ガ」によって提示され、形態上体言と用言の意味的關係を類型化したものの一種であり、「主題」はディスコース上の分類で、係助詞「ハ」によって提示され、何について話すか、という主題又は題目と、その主題について何を言うかによる情報構造を示すものである。ただ、構文上の主語が、形態上の主格やディスコース上の主題にあたることは多く、主格や主題が、プロトタイプとしての主語の一要素になることが多いのも事実である。本稿では、主語の省略条件を明らかにすることにするが、主格或いは主題についての先行研究にも踏まえて研究を進めていきたいと考えている。(仁田(1997)、仁科(2008)を参照)
- 3) i は同一性(identity)を表す。ある二つの要素の右下に i をつけることによって、その二つの要素が同一指示的であることを表す。二組の同一指示関係が認められる場合、i と j を使いわけてそれぞれの同一指示関係を記す。ただし、先行話題と同一指示関係になる場合には、両要素の右下に T をつける。話し手/聞き手を指し示す場合には、話し手が聞き手かによって、右下に S か H かをつ

けることにする。

- 4) [] は、分析の便宜のため、主節から従属節を分離して表記する記号である。
- 5) 本稿の調査では、南(1976)の「ノデ」が代表する B 類従属節には「～ハ」が出ないという規定に基づき、主節と従属節の主語が同じ先行話題と同一指示的であり、かつ両方とも省略される例については、「主節主題一致」型主語省略のように扱う。
- 6) 久野(1978 : 134)によると、「文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy) と呼び、その度合い、即ち共感度を $E(x)$ で表す。値 0(客観描写)から値 1(完全な同一視化)までの連続体である」とされる。久野(1978)は一般原理として、視点についていくつかの制約を提唱した。まずは、視点の一貫性というものである。視点の一貫性とは「単一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない」(久野(1978 : 136))ということである。

例文出典

東野圭吾(2002)『白夜行』集英社文庫。

参考文献

久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店。

永野賢(1952)「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29:2, pp.30-41.

成山重子(2009)『日本語の省略がわかる本』明治書院。

日本語記述文法研究会(編)(2008)『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版。

仁科洋江(2008)「初級文法の記述を考える ―主語・主体・主格・主題―」『日本語教育連絡会議論文集』20, pp.12-18.

仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説』くろしお出版。

野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則(2002)『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店。

付改華(2012a)「日本語の複文における主語省略の条件について ―省略要素の同定を中心に―」『言語の普遍性と個別性』No.3, 新潟大学現代社会文化研究科, pp.99-125.

付改華(2012b)「複文の従属節における主語省略について ―「カラ」節を中心に―」『現代社会文化研究』第 52 号, 新潟大学現代社会文化研究科, pp.265-282.

前田直子(2009)『日本語の複文』くろしお出版。

益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版。

三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版。

南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店。